

Title	思考についての哲学的探求 : ギルバート・ライルの観点から
Author(s)	池吉, 琢磨; 中山, 康雄
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2007, 33, p. 21-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7708
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

思考についての哲学的探求

ギルバート・ライルの観点から

池 吉 琢 磨 ・ 中 山 康 雄

目 次

1. はじめに
2. ライルの思考の分析の概要
 - 2.1 思考と独白
 - 2.1 思考と技能
 - 2.1 思考していると言えるための条件
3. 思考の本質的特徴
4. 思考とアナロジー
5. おわりに

思考についての哲学的探求 ギルバート・ライルの観点から

池吉琢磨・中山康雄

1 はじめに

ロダンの「考える人」は、一体何を考えているのだろうか。これは、G. ライルが『心の概念』以降の論文や講演の中でしばしば取り上げてきたテーマだった。考える、あるいは思索する、熟考するということは本質的にどのようなことなのか。ライルは、思考の概念を探求してゆく中で、行動主義などの還元主義とも、心身二元論などの二重主義とも異なる視座を提示することを試みた。それは、ある意味では思考の概念を近年の認知科学の文脈に乗りやすい形に再構成しようとする試みであったと言えるだろう。本論文では、思考をめぐるライルの議論の検討を通じて、これまで殆ど注目されることのなかった、『心の概念』以後のライルの哲学の主要な論点を明らかにすることを試みる。また、この試みは同時に、認知科学、とりわけアナロジー研究に対して思考の概念に関する理論的基盤を提供することにもつながるだろう。

本題に入る前に、本論文における「考える」や「思考」という語の意味を明確にしておきたい。本論文における「考える」とは、特定の意見を所有していることではなく、思案していること。つまり、「あることが事実であると考えている (*think that something is the case*)」ことではなく、「何が事実かを考え出す (*think out what is the case*)」活動のことを意味している。従って、本論文では「考えること」と「信じていること」との関連については触れない。

2 ライルの思考の分析の概要

ライルによる思考の分析は、次の二点を明らかにすることから始まっている。ひとつは、思考にとって思考内容を表象・伝達するものは不可欠であるが、「思考は言語である」という主張は間違っているということ。もうひとつは、思考は特定の技術や技能、技量の行使に還元することはできないということである。まずは、この二点に関するライルの分析を検討してゆくことにしよう。

2.1 思考と独白

思考とは何か、という問いに対するかつてよく見られた応答のひとつに、「考えるとは自分自身に何かを言うことである」というものがある。この応答それ自体は、確かに思考のある側面を捉えているように思われる。しかし、「自分自身に何かを言う」という概念によって何を意味しているかによっては、深刻な問題を抱えることになる。その中で特にライルが問題視する見解は、二つある。ひとつは、「独白はもう一人との会話であるとか、あるいは内的独白は秘密のシャム双生児の片割れとの対話である」とする見解。もうひとつは、「注意しながら意図的に自分自身に対して何かを言っている人は、その故に、自分自身に対して言っているときに発している当の語や句で考えている」つまり、思考は言語もしくはシンボルという形でなされねばならない、とする見解である。

この二つの見解に対して、ライルは次のような例を挙げて反論する (Cf. Ryle (1979) [訳書 p.93-95])。今、何の躊躇いもなしに、誤りもなく、頭の中で、或いは声に出して、自分自身に対して「いち、に、さん、……」という数列を次々に言うことのできる子どもがいますとしよう。この子どもは、次に、ものを数えるという新しい種類の作業を習得しなければならない。そして、「部屋の中に何人いるかを調べよ」という課題が彼に与えられる。このとき、正しい答えを出すためには、彼は声に出して、或いは頭の中で、然るべき列の数詞をざっと辿る必要がある。また同時に、数えなければならないそれぞれの人にそれぞれの数詞を正確に割り当ててゆくという作業も行なわなければならない。もし、一人の人に二つの数字を割り当てたり、二人の人に同じ数字を割り当てたりすれば、彼は数え間違ったことになる。また、でたらめに言った数字がたまたま部屋の中にいる人数と一致したとしても、彼が部屋の中の人数を数えたことにはならない。従って、部屋の中に十七人の人がいる場合、たとえば六番目の段階では「ろく」という数を言う必要があるが、同時にその数詞を六人目の人に適切に割り当てる必要もある。しかし、質問者は部屋の中の人数を尋ねているのだから、彼が声に出して「ろく」と言うのを聞くことは、教育的な目的でもない限り、必ずしも必要ない。彼が「ろく」という数を言う目的は、発見的なものである。つまり、部屋の中に何人いるかを見出そうという目的でそうしているのである。「ろく」と言うこと自体は、彼が行きたい場所に行き着くときに通らねばならない必要なステップに過ぎない。

この、非常に低いレベルの事例において、上の二つの見解が当てはまらないことは明らかだろう。この子どもの独白は、誰かに　そして自分自身にすら　聞かせる必要のないものであり、文字「ろく」で何かを考えていたわけでもない。数えるという作業に熟達した人であれば、独白そのものが不要かもしれない。そしてこのことは、より高次の思考においても当てはまる。

「まったく同じではないが同種のことが、何かの証明を構成したり、何かを論証したり、反証したりしようとしている思考についても妥当する。たとえば、ユークリッド、あるいは、彼とはかなり違うが、シャーロック・ホームズのような考える人をとってみよう。彼らは述べられた道筋を通して、あるいは少なくとも、真なる命題であると述べられたものを經由して、向こう岸、つまり、ある命題を確立するという目標へと一步一步進んでゆく。もしくは、一步一步進んでいこうとしている。彼の当座の言明、すなわち踏み石となる言明は、今ここにおいては発見的な狙いをもったものであるにすぎない。」

(Ryle (1979) [訳書 p. 97])

たとえば、自分の議論を練り上げているシャーロック・ホームズの目的にとって、彼の口にする踏み石となる言明が誰かに聞かれているか否かということは重要ではない。それらの言明は、その誰かのために言われるのではなく、その言明を口にした人自身がどこかに到達することを可能にするために、しかも当然の手順を経てそこへ到達することを可能にするために言われるのである(もっとも、ホームズ自身はその踏み石を口にするのをあまり好まなかったが)¹⁾。

2.2 思考と技能

思考にとって独白が本質的な役割を果たすとは限らない、というのが正しいとするなら、思考の本質的特徴とは一体何なのだろうか。ひとつ考えられるのは、思考とは特定の技能の行使に他ならない、という見解である。これに従えば、先の数え上げの事例において子どもが行った思考とは、数え上げの技能の行使であるということになる。だが、少し歴史を振り返れば判るように、「……に他ならない」という形でなされる主張の多くは深刻な問題を抱えている。

思考とはどのような知的営みであるかを考えるに当たって、ライルはプラトンの対話篇『メノン』におけるソクラテスと奴隷の少年の話を取り上げている。この話は、ソクラテスが幾何学の知識のない奴隷の少年に、与えられた正方形の二倍の面積をもつ正方形を作るにはどうすれば良いかを尋ねるといものである。このとき、ソクラテスは少年に対して幾何学的な真理を一つも教えていない。彼はただ少年に質問し、その答えが間違っている場合には、さらなる質問によって間違いに気づかせるだけである。この話の中で重要と思われる点が三つある (Cf. Ryle (1979) [訳書 p.143-144])。 (a) 少年は既に初歩的な算数を少しだけ身に付けていて、アテネのギリシア語を話すことができる。 (b) この質問的教授法は、昨日の死亡者数や次の日食の日時のような事実的な問題についてはあまり、或いは全く、役に立たない。 (c) 少年はそれぞれの質問に対して、最初は良くない答えを、最後は求められた良い答えを出す。全証明を自分で考え出したとは言えない。彼は失敗した後、鎖

の輪を一つずつ検討するが、全体の鎖を制御しているのは、既にピタゴラスの定理の証明を知っているソクラテスなのである。それでは、この話において少年は思考していたとは言えないのだろうか。いや、彼は確かに思考していたのである。彼はとにかくピタゴラスの定理に到達したのであるから。だが、彼の思考はいかなる技能の行使であったのだろうか。初等算数の知識の行使？ 確かにその通り。だが、それで事足りるのであれば、彼にとってソクラテスの存在は一体何だったのか。

以上を踏まえた上で、ライルの挙げたもうひとつのソクラテスと奴隷の少年の話を見てみよう。ちなみに、これはライルの創作である (Cf. Ryle (1979) [訳書 p.144-147])。ソクラテスは再び少年にある証明問題を出し、以前と同様、まず適切な質問を行い、それに対する少年の間違った答えを否定してゆく。しかし今度は、ソクラテスがこの定理の後半部分をすっかり忘れてしまった、或いはもっと悪いことに、元々それを知らなかったことに気づく。彼はどう進めば良いのか判らない。彼は率直にこの危機的状況を少年に打ち明ける。しかし少年は、そのことの何が問題なのか少しも理解できない。彼は次のように言う。「あなたは昨日、私にひとつも答えを教えてくれなかった。あなたは私に質問をただけで、私が何回か失敗した後、あなたに正しい答えを与えたのだ。どうして再び、そうすることができないのか」と。ソクラテスは、闇雲に質問しても、そこから正しい証明が生まれることはまずありえないことを説明する。しかし、十分な教育経験と幾何学的知識をもっているのに、馬鹿げた質問や無関係な質問、或いは幼稚な質問をすることはないし、またあまりに愚かな答えはそれとして見抜くことができることは認める。彼はこの領域の全体に通じているが、ただこの特定の部分を知らないだけなのである。そこでソクラテスは、極めて悲観的ながら、思いついた質問を次々と試してゆく。初めのうちの成果は、一、二の質問が少し有望に感じられたという点を除けば、質問の大半はもう問題にしない方が良いという否定的な発見だけだった。だが暫くすると、見えない目標に向かってまっすぐ進んで行くことは依然として不可能であるとしても、個々の障害を回避することは容易になってゆく。そして恐らく最終的には、ソクラテスの場当たりのな水先案内も、彼らの望む地点の近くに、或いはまさにその地点に連れて行くだろう。

この話からライルは次のような教訓を導き出す。すなわち、このようなソクラテスと奴隷の少年を一つに合体させた状態こそ、かのピタゴラスの定理を証明しようとしてピタゴラスが陥っていた状態に他ならない、と。ピタゴラスは考えることによって、最終的にこの証明を完成させたわけだが、彼はその思索中ずっと、まだ自分自身や他の人に答えを教えることができるような状態にはなかったのである。一般に、考える人は、教師が生徒に自分の知っている事柄を教えるときに使用するような類の、必ずしも成功するとは限らない方策や工夫などを、自分自身に対して、暫定的、実験的、懐疑的に試しているのであって、失敗して落胆することも極めて

多い。それらは既に確立された導きの糸なのではなく、ありうべき導きの糸、或いは糸口の候補、可能な糸口に過ぎないのである。

以上を踏まえた上で、ライルが示した教訓をまとめてみよう。第一に、「思考」とは特定の技術や技能、技量ではない。もちろん、問題の領域が異なればそれに応じて異なる工夫や手段が必要となるだろう。しかし、考えることがソクラテスと少年の両側面を備えたものであるとするなら、思考は特定の技能のみで成り立つわけではない。第二に、「思考」にとって思考内容を表象、伝達するものは不可欠である。しかし、「思考は言語である」という主張は、思考にとって本質的な点を見落としてしまっている。その点とはすなわち、考える人は、教師が生徒に授業を行なう際の伝達手段になるような種類のもの（語、文、図、信号、身振りなど）を、自分自身に実験的に試している、ということである。

2.3 思考していると言えるための条件

しかし、ここまでのライルの説明は、我々が最も興味をもつ点に言及していないように思われる。それは、我々はいかにして当意即妙な思考を可能にしているのか、という点である。このような疑問を抱くとき、しばしば次のような想定がなされる。すなわち、考えることの本質は、常に一連の「心的」な蛙飛び（論理規則に従い推論の階段を上って行く）を経験することに他ならない、と。だが、これが誤った想定であることは容易に見て取れる。たとえば、ある人があの即興的でタイミングを得た冗談を言うことが可能だったという事実は、その人がその瞬間において確かに目覚めていて、そして機転を利かせたのだという何よりの証拠だろう。また、それが無意識運動や発作などではなく意図的だったという理由から、それを言ったことが非難されたり賞賛されたりすることも当然だろう。更に、その人は自分が述べたことに注意を払っていたことも明らかだろう。しかし、その人の思考がどのような段階によって構成されているのかを時間的順序に従って記すよう求めるならば、その人は「いや、ちょっとそういう考えが浮かんだので」と答える他に言いようがないだろう。このことは、案出し熟慮するという連続作業がいかに密度の濃い、或いは迅速なものであるかを問わず、ある種の思考が段階的な進行過程を必要としないことを意味しているのではないか。そうでなければ、その冗談を言ったことが無意識運動か発作のいずれかによるものになってしまう。このように、思考を上のようなものとして想定する限り、そこには個々人の自発性や選択や創意や想像力などの入る余地がなくなってしまうのである。

それでは、ライルは「いかにして当意即妙な思考が可能となるのか」という問いに対してどのように答えるのか。まずライルは、自然の斉一性を確信する傾向に対して次のように反論する。

「情況、偶発事、好機、偶然の出来事などはそのすべての付随物をも含めて、それ以前に生じたことはなく、また二度と再び生じることがないように諸々の起源と事細かな事情を背負っている。それはまったく注目に値しないものでありうるし、また実際に大抵の場合、そうなのである。それが起こる以前にはそれが生じるかもしれないなどとはまったく予期されていなかっただけに、それが生じたときにはそれはなんらの意外性をもそなえてはいない。世界と世界のなかにおいて生じする出来事は、二三の例外を除いて、渾沌状態にあるのでもなければ、時計仕掛けのような状態にあるのでもない。」

(Ryle (1979)[訳書 p. 232])

たとえば、野球の外野手は、その試合で守備に回っている間、捕らえるべきボールが自分の方にやって来ることを期待している。しかし、今彼が居合わせたその場所に、特定の速度と軌道で飛んでくるその特定のボールに対して、捕球すべく完璧な準備を整えていたとは言えないのであり、また実際に整えていないのである。確かに、彼は練習を重ねることによってどのようにボールを捕らえるかを習得している。しかし、試合におけるまさにこの捕球を練習しておくことは論理的に不可能だったのである。つまり、彼が捕球に成功（失敗）したことは、たった一度限りの、しかし彼が以前に捕球に成功（失敗）したときと全く同様のチャンスにおける、たった一度限りの捕球（の失敗）だったのである。従って、彼が捕球に成功したことは、適切に、そして臨機応変になされた革新的なものだったと言うことができる。それでは、以前の捕球の練習は、試合におけるその捕球に対して何ら意味を持たなかったのだろうか。勿論そうではない。練習の中で彼が習得した技能は、その特定の捕球における彼の拳動をある程度支配していたのである。続けてライルが指摘したのは、「革新的ではあるが段階的ではない思考法は推論自体においてさえも必要な要素である」(Ryle (1979) [訳書 p.235]) ということである。次の例を見てみよう。それは、女性たちが親愛なるアベイ神父の思い出話に耳を傾ける、という話である。

「あるとき、彼は自分の最初の懺悔者が殺人を告白したということを彼女たちに語る。ちょうどその直後、ひとりの貴族が入ってくる。彼は旧友であるアベイに挨拶をした後で、自分がアベイの最初の懺悔者であったことを女性たちに告げる。そこで女性たちは、かつて殺人を告白したのがその貴族であるという、衝撃的ではあるが論争の余地のない結論を引き出したのである。」

この話において注目すべきなのは、女性たちが次のような二つの極めて特殊な状況により、素早く推論を行なうよう仕向けられていたということである。ひとつは、アベイと貴族による二つの情報が、たまたま即座に連続的に女性たちに提供されたこと。もうひとつは、この二つの情報が、どちらもきわめて人の話題になりやすい事柄であったということである。彼女たちが即座に結論を引き出したのは、殺人を

告白したのは誰なのかということと、その貴族が何を告白したのかということとを知りたいという願望が同時に生じたことに起因するのである。もし二つの情報のうち、ひとつが一週間後に与えられたとするなら、或いは貴族の懺悔が「一生懸命働くのが嫌だ」というものであったなら、即座に結論を引き出すということはなかったかもしれない。次に、この女性たちが引き出した結論について考えてみよう。彼女たちのうち何人かは、その貴族に大変好意を抱いていたため、彼が殺人を犯したという考えを受け入れることに乗り気でなかったとしよう。そこで彼女たちは、その二つの仮説によって正しさを立証する恐れのあるその議論に欠陥を見出せるのではないかという希望を抱きながらも、その衝撃的な考えを、不本意ながらしばらくの間受け入れるのである。このように、いまだ拒絶することができるものとしてその情報の内容を検討している限り、彼女たちが思考しているということは疑いない。そして、このような疑念に充ちた思考は、仮説集めなどという秘められた作業などを必要としない、非軌道的なものなのである。

以上から、ライルは二つの教訓を引き出す。思考者がある状況において思考しているとき、(a)その人は、少なくとも新奇な偶発事に専念していなければならない。また、その人は探究心に溢れ、かつ試行錯誤的であり、さらには進取的であるという条件の全てないしそのいずれかを備えている。(b)その人はある程度、このたった一度きりの特定の偶発事に関して、かつて習得し、それ以来すっかり忘れていたのではないような何らかの一般的な教訓を役立てていなければならない。

3 思考の本質的特徴

ここまで、我々はライルの思考をめぐる議論を概観してきた。そこには幾つもの重要な論点があったが、幾つかの不明瞭な点も抱えている。その中でもライルの議論の本質に関わる幾つかの疑念について、例を挙げて検討してみたい。

数学の二次方程式を学習している生徒が新しい問題(たとえば「 $2x^2+11x+12=0$ 」)を与えられたとしよう。まず生徒は、過去に学習した解法の中からこの問題に適合するものを検索する。このとき、検索する領域はおおむね限定されている(でなければ、その生徒は途方に暮れてしまうだろう)。その結果、生徒は幾つかの解法を候補として思い浮かべるかもしれない(たすきがけを用いた解法、解の公式を用いた解法など)。どの解法を想起し、適用するかは、過去に類似の問題を解いた時の経験によって左右されるだろう。生徒はその解法に沿う形で解答を試みるが、それは生徒にとって新奇な問題であるため、正答にたどり着けるかどうかは(少なくとも当人にとっては)自明ではない。正答に至らない場合は、途中の計算を見直したり異なる解法を選択し直したりすることになるだろう。

この説明は、次のような問題点を抱えているように思われる。

(a)この説明によると、生徒は一般的な教訓を想起し、かつそれを特定の偶発事に適合させるというふたつの作業を行っているように思われる。確かに、生徒が解法に熟達していない間はそのようなまどろっこしい作業をしているように思われる。しかし、十分に熟達した者であれば、わざわざ公式を思い浮かべることなく正答を導き出すことができる筈である。だとすれば、このふたつの作業は同時に行われていることになるのだろうか。事実、ライルは臨機応変の対応と方法論の結合が必要であると主張している (Cf. Ryle (1979) [訳書 p.240])。だがこれは、かつてライル自身が拒絶した主知主義 (Intellectualism) の教義に他ならないのではないか²⁾。

もちろん、ライルはいかなる意味においても主知主義に与してはいない。というのも、主知主義はこの「一般的な教訓」が真なる命題でなければならないと主張するのに対し、彼が「一般的な教訓」によって意味しているものは、一般化された命題のような言語的表象であるとは限らないからである。ライルは、この一般的な教訓を knowing-how として特徴づけ、一般化された言語的表象である knowing-that と区別した。この区別は知識とは何かをめぐる哲学的問題に関わる問題ではあるが³⁾、ここでは、ライルの議論と類比的な事象が身体性認知科学 (embodied cognitive science) において紹介されていることを指摘するだけにとどめたい。身体性認知科学とは、認知主義的な情報処理モデルのような、すべてを記号化して考察する記号処理として脳を捉えるのではなく、感覚系と運動系を基礎とした、両者の階層的な相互作用から脳の働きを捉える立場である。それによると、人間の行動制御は次のような仕方で説明されるという。行動制御の基盤は、身体とその感覚受容器、そして運動の効果器と結びついた神経系に依存している。特に大脳皮質運動野は、行動の文脈に応じた運動制御を行なっていることが知られている。なかでも高次運動野は、状況に応じた効果器の制御のみならず、効果器とその特定の運動に依存しない認知的側面 (動作対象の運動、順序順番、モニタリングと認知的不一致等) を、それぞれの神経細胞集団の回路で表現しているという。さらに前頭前野は、抽象度の高いカテゴリー化やルール化、将来の行動結果の予測、目標設定、行動の意図表現、照合、判断等の認知的な内部表現の生成に関与すると考えられる (Cf. 虫明(2006), pp. 9.)。このように、行為遂行に関わる運動野は、行為の認知的な側面にも深く関わっている。これと同様のことが、知識についてもあてはまる。身体的な基盤をもつ感覚運動的なモジュールは、その多くが手続き的知識に属するだろう。しかし、手続き的知識は感覚身体的 (非言語的、非表象的) なレベルからより抽象化されたレベルまで階層的に表現された、身体化された内部表現として存在していると考えられる。一方、宣言的知識は言語的、表象的である。認知的に抽象化されており、外部表現が可能である。これらの知識は依存する神経系も異なることが知られており、機能的にも分離可能な知識と考えられてきた。しかし、実際には両者は依存し

あっている。多様な手続き的知識と宣言的知識が結びつくことで、日常の中の様々な環境の中で融通性を得ているのではないか、という指摘がなされているのである (Cf. Ibid. pp. 9-10)。

『心の概念』を知っている人ならば、ここでの手続き的知識と宣言的知識の区別が、『心の概念』における knowing-how と knowing-that の区別に類比的であることは比較的容易に見て取れるだろう。手続き的知識や knowing-how が、宣言的知識や knowing-that と同じ意味で「知識」と呼べるかどうかについては疑問が残るが、当面の目的にとって重要なのは、我々の行為が非 表象的な感覚運動モジュールに制御されているか、それとも表象的な規則に支配されているかは、それが思考であるかどうかを判断する上で本質的な差異をもたらさない、ということである⁴⁾。両者が互いに依存しあっているのであれば、尚更である。従って、前節末尾に上げたふたつの要件 「この瞬間において直面しているたった一度だけの状況に自分自身を適用させること」と、「過去において習得した経験を利用すること」 は、それ自体が表象的な作業であると考えする必要はない。また、ある行為が表象的であるか否かは、その行為が意図的であるか否かを判断する唯一の要素ではない⁵⁾。

(b) ライルの議論は、思考により導出された帰結について、その正当性を保証することができないように思われる。上の生徒の事例に限っていえば、特に問題はない。生徒は学習の途上にあるのだから、その生徒は自身の出した解答の正誤を評価する術を知らない、ということはあるそうなのである。それでは、生徒の解答の正誤を評価する教師の思考についてはどうか。教師の思考は、生徒と何において異なるのだろうか。

この問いに答えるためには、帰納と演繹という、哲学にとっておなじみの概念について顧みなければならない。帰納と演繹に関するライルの見解は、現代の我々から見れば、極めて標準的であると言って良い。それは、論証とはすべて仮説演繹法の形を取るのであって、帰納的論証というものは存在しえない、というものである⁶⁾。しかし、論証の探求は演繹的でも非 演繹的でもない、とライルは指摘する。論証は演繹的な散文によって表されなければならないが、論証は結論を発見する方法ではない。それは、結論を示すことなのである (Cf. Ryle (1993), ch.4.)⁷⁾。一方、発見の文脈においては帰納的思考が重要な役割を果たしている、とライルは指摘する。「帰納的」ということでライルが念頭に置いているのは、単なる丸暗記 (rote-learning) や習慣 (habituation) では対処できない新奇な事象に直面したとき、それに取り組む指針を与える「経験的学習」(empirical learning) である。上の例の場合だと、経験的学習が機能する場面は少ない。解答に必要な解法が既に与えられているからである。一方、前節で挙げたソクラテスと奴隷の少年の第二の例では、解法の探求という更に厄介な作業が控えていた。彼らはこれまでに獲得してきた知識を最大限活用しつつ、気の遠くなるほど地道な試行錯誤を経験しなければならな

かったのである。従って、生徒と教師の思考の相違について、次のように答えることができるだろう。すなわち、教師は生徒が形成した計算過程と解が論証として妥当であるか否かを検討しているのである（論証を検討することは論証ではない）。（c）ところで、我々は教師のように既に示された論証を検証する場合でなくても、ある程度論理的に思考することができるのは事実である（でなければ、そもそも論証を形成することはできない）。それでは、論理性や合理性といった概念は我々の思考においてどのような仕方で影響を及ぼしているのだろうか。このような問いに対するひとつの示唆を、ライルの『ジレンマ』の中に見出すことができる。

「ブリッジをする人やポーカーをする人が使用する用語の意味には、それらのゲームの種々の体系や図式がたっぷり盛り込まれているのは明らかだと思われる。ある人がポーカーの初歩さえ覚えなくて「ストレートフラッシュ」の意味を覚えたり、ストレートフラッシュが何かを覚えなくてポーカーのすべてを覚えると想定するのは、不条理というものであろう。簡略のために、「ストレートフラッシュ」という用語を「ポーカー負荷的」(poker-laden)な用語と記述することにしよう。これと同様の大雑把な仕方で、ある科学の特殊な用語は、大なり小なり、その科学の理論負荷で溢れている。遺伝学の専門用語は理論負荷的であるが、それは、たんにあれこれの種類の理論上の手荷物を負荷されているというのではなく、遺伝学の理論の荷物を負荷されているのである。専門用語の意味はその理論の変化とともに変化する。専門用語の意味を知るといことは、その理論の何らかの理解を必要とするのである。」

(Ryle(1954)[訳書 p.146-147])

この線に従って考えると、次のように言うことができるかもしれない。すなわち、論理性や合理性といった理論的概念は思考負荷的である、と⁸⁾。これと同様に、アベイ神父の事例において見たような願望や疑念といった心的事象も思考負荷的だと言えるだろう。但し、理論的概念は専ら思考の進行過程に対して負荷的であるが、心的事象は専ら思考の目標に対して負荷的であるという点で異なっているように思われる⁹⁾。再びアベイ神父の事例を用いると、あの貴族が殺人を犯したという自らの推論に疑念を抱く女性たちは、自らの推論の正当性に疑問を抱いているのではなく、その帰結を受け入れるための更なる証拠を求めているのである。

以上を踏まえて、思考の本質的特徴をまとめると次のようになる¹⁰⁾。

【思考の本質的特徴】

- 1) 思考とは常に新奇な事象を含んでいる。(単なる丸暗記や習慣では対処できない)。

- 2) 思考には次の点で順応性がある(経験的学習の特徴)。
 - a) 思考は具体的な状況の相違に対して敏感であり、既に獲得した(表象的ないし非表象的な)ルーチン(ライルの言い回しでは、「技術、経験」¹¹⁾)をその状況に合わせて適切に修正する(思考は自己修正的である)。
 - b) 思考は、もし環境が急激に変化すれば、それに対応する全く新しいルーチンを生み出す。
- 3) 思考は単一の目的の達成のために多様なルーチンを示すことができる。ルーチンの選択に当たっては、当の作業よりも高次の思考が影響を与えることがある(選択が常に合理的であるとは限らない)。
- 4) 思考は試行錯誤的である。従って、思考内容の正当性に対する問いは常に開かれている(思考はそれ自体では論証ではない)。
- 5) 思考は学習によって得たルーチンを新たな状況に伝達することができる(解決の一般化)。
- 6) 思考は階層的である。行為の目的に関わる高次の思考(期待、疑念、等々)は、個々の行為遂行に関わる思考をゆるやかに支配している。

4 思考とアナロジー

ライルによる思考の分析の何よりの長所は、人間の知性をめぐる旧来の議論がまわっていた神秘性を極力排除する形で構成されているという点にある。もちろん、彼の分析は神秘のヴェールをすべて引き剥がすには至っていない。しかし、彼の議論は認知科学など他の領域におけるアプローチと関連付けることで発展させることができるように思われる(先に触れた身体性認知科学との関連も、その一事例である)。

ここまで取り上げてきたライルの議論が思考の分析であったということは疑いがないとしても、彼の議論は、依然として我々が思考について知りたいと思っているある点について言及していないように思われる。それは、偉大な発見や発明をもたらした、思考の「閃き」の存在である。ライルは、思考とは試行錯誤の連続から成るという、常識的ではあるが面白みに欠ける見解を示した。確かに、非凡ならぬ者にとって、そのような試行錯誤の連続は止むを得ないことなのかもしれない。だが、偉大な発見とまでは行かなくとも、ある種の閃きが生じた、という経験は誰にでもあるだろう。そしてまた、愚にもつかない思い付きが浮かんだ、という経験も、恐らくは閃きよりも多く、ある筈である。ライル自身、そのような「閃き」や「思い付き」を許容するような形で思考の概念は説明されなければならないと考えていた。しかし、彼の議論からこの点に関する積極的な説明を見出すことはできない。

この問題に対するひとつの解答を、アナロジー研究の中に見出すことができる。

アナロジーとは、知りたいことや未だによく知らないこと（ターゲット領域）について、既によく知っていること（ベース領域）の要素を対応付ける（mapping）ことにより、何らかの事実や仮説を得る作業である。この際、ターゲット領域とベース領域の間には何らかの類似点が存在していなければならない。しかし、あらゆるものは何らかの点で類似していると言える。従って、どのようなレベルでの類似性に注目するのが、アナロジー研究における重要な問題となる。

アナロジー研究に携わる認知科学者たちは、類似性について少なくとも三つの区別を行っているという（Cf. 鈴木（1996）p.37-47）。ひとつは、対象レベルの類似性（object-level-similarity）である。これは二つの対象の間の類似性であり、対象の間で特徴がどれだけ共有されているかによって評価される。もうひとつは、関係レベルの類似性（relational similarity）である。これは、ベースに存在する関係とターゲットのそれとの共有の度合いに基づく類似性である。そして、上の二つでは扱うことのできない類似性として、プラグマティックな類似性を挙げることができる。これは、問題の解決、或いは目標構造レベルでの類似性である。たとえば、「この問題とあの問題は、三平方の定理を用いるという点で似ている」という場合の類似性は、プラグマティックな類似性に基づく認識である。これらの類似性のうち、いずれを重視するか（又はしないか）については理論によって異なる。たとえば、D. ゲントナーの提唱する構造写像理論は関係レベルの類似性を重要視する（プラグマティックな類似性については言及しない）。一方、K. ホリオークと P. サガードの提唱する多重制約理論は、三つの類似性に基づく制約を並列的に充足させるベースを検索、選択し、直面している事象に対応づけるという戦略を採っている（Cf. ホリオーク & サガード（1998））。プラグマティックな類似性を重視する立場としては、鈴木宏昭の提唱する準抽象化理論がある。これは、アナロジーをターゲット領域とベース領域との直接的な対応付けとしてではなく、両者の間に抽象化¹²⁾を介在させた過程として捉える立場である。つまり、アナロジーに用いられる対象や関係はいちど抽象化され、目標の達成という観点から意味的・機能的なまとまりを与えられているのである（Cf. 鈴木（1996））。

これら一連のアナロジー研究とライルの議論を関連付けることは、それほど難しくない。というのも、ライルの経験的学習に関する議論はアナロジーの基本構造と極めてよく似ているからである。経験的学習におけるルーチンを、アナロジーにおけるベース（とその抽象化）と同等のものだと考えると、その関連性は一層際立つかもしれない。もちろん、全てが重なり合っているわけではない。しかし、その差異は矛盾をもたらすものではなく、むしろ互いに重要な示唆を与えるものであるように思われる。特に、ライルの議論がアナロジー研究から得るものは極めて大きい。しかし、ここで指摘しておきたいのは、ライルの議論がアナロジー研究に対して提示することのできる、二つの示唆である。

ひとつは、アナロジー研究においてしばしば問題となるのは、「類似性」という言葉のもつ曖昧さである。類似の度合い(これを定量的に示せるのかどうかも疑問だが)は、アナロジーの正当化の成功率と相関関係にあるように思われるが、画期的な発見において見られるアナロジーの中には、多くの人が見落とすような些細な類似に基づいているものも多く見られる。要するに、何をどのように結び付けようと、アナロジーは成立してしまうのである。そのアナロジーが適切かどうかは、アナロジー自身から判断することができない。この指摘は、確かに事実である。事実であるが、そもそも思考は試行錯誤的であることを考えれば、正当性の問題は、少なくとも本論文における意味での思考におけるアナロジーの役割を考える上では引き受けなくてもよい。

もうひとつは、準抽象化理論などに見られるプラグマティックな制約についてである。先に我々は、ライルの議論を受けて、論理性や合理性などといった理論的概念、そして期待や疑念といった心的事象が思考負荷的であると述べた。だとすると、もし経験的学習とアナロジーが密接に関係し合っている、或いは両者を統合できるなら、アナロジーの遂行に対して負荷的な、高次のプラグマティックな制約を想定する必要があるだろう。だとすると、思考負荷的な事象として挙げた論理性は、アナロジー負荷的でもあるということになるが、これはアナロジーと演繹を混同することにはならないのだろうか。これに対するひとつの可能性は、アナロジー研究の側から提示されている。たとえば鈴木は、アナロジーと演繹が共通の基盤をもっているとした上で、演繹こそがアナロジーの特殊ケースではないかと指摘している(Cf. 鈴木(1996) p.143-144)。演繹をアナロジーの一種と見なすか、それともアナロジーを演繹の一種と見なすかについては議論があるべきだが、両者が密接に関係していると考えれば、論理性を思考の高次の制約として見なすことへの抵抗は少なくなるだろう。

5 おわりに

本論文を終えるに当たって、我々が何を主張し、また何を主張しなかった(できなかった)かについて明らかにしておきたい。まず本論文で解明を試みたのは、「何が事実かを考え出す」という意味での思考の概念であった。従って、「あることが事実であると考えている/知っている」という意味での思考については特別な主張を行っていない。また、本論文ではライルの思考の概念をめぐる分析を取り上げ、彼のアプローチが最近の認知科学の領域における成果(とりわけアナロジー研究)と整合的であることを論じた。『心の概念』以後のライルの議論がAI研究に対して開かれていると指摘したのは坂本百大であったが¹³⁾、本論文はその指摘に対するひとつの肯定的な応答であると言えるだろう。しかし、これによって思考の概念が全

て解明されたわけではない。特に思考の階層性に関しては、哲学のみならず脳科学など複数の領域において探求してゆくべき問題だろう。それでも、思考の問題に取り組む上でのひとつの足がかりを提示しえたという点で、本論文は何がしかの価値をもつだろう。

注

- 1) ここで注意しなければならないのは、目標へ到達した結果得られた証明や論証は、もはや我々が今注目している意味での思考と必ずしも同一ではない、ということである。それらの多くは、全ての人が、最小限の労力で理解できるよう整理されているのである。最初に考え出した人が経験した知的苦勞や苛立ち、まぐれ当たり、アイデアなどは、証明や論証を理解するという目的にとって重要ではない。しかし、それらは我々が注目する思考を構成する重要な要素なのである（この点については後述する）。
- 2) 主知主義に対するライルの批判については Ryle (1949)を参照。
- 3) なお、我々はこの問題について科学基礎論学会 2006 年度総会において「事実的知識と遂行的知識の区別」と題した発表を行っている。
- 4) 脳過程のレベルにおいて表象が不可欠であるとするフォーダーらの主張に対する批判としては中村（2006）を参照。
- 5) とは言え、表象を用いた思考の中には、そうでない思考に比べて（抽象度が高いという意味で）高次なものが多く見られる、というのは事実であるように思われる。従って、我々は表象概念の存在を否定するつもりはない。
- 6) 但し、ライルは確率論的帰納については念頭に置いていなかったものと思われる。
- 7) この主張は、科学的発見とその正当化を区別することを主張するポパーやライヘンバッハのそれと類比的である（Cf. 内井（1995),ch. 2.）。
- 8) ここでの「負荷的」という語は、あまり強い意味で考えるべきではない。我々はついうっかりポーカーのルールを破ってしまうことがあるし、かつては正統であるとされた科学理論が後に覆されるということもしばしば起こりうるのである。これは、思考負荷的な事象が決定的な力をもつとは限らないこと、そして負荷の内容は変化しうることを示しているように思われる。
- 9) このような心的事象を「心的志向性」(mental intentionality)として考えるならば、ライルの議論を志向性をめぐる議論と関連付けて論じることができるかもしれない。しかし、この点は今後の課題として残しておくことにする。
- 10) これと類似の主張を、Altman (1997)に見出すことができる。但し、彼は理知的行為全般を特徴づけることを試みている。本論文で行ったのは、冒頭で述べた意味での「思考」の特徴づけである。
- 11) 身体性認知科学における手続き的知識と宣言的知識の関係をめぐる議論は、ま

さにこのルーチンをめぐる議論であったとすることができるだろう。

- 12) ここでの抽象化とは、次の性質を満たすことを要求している点で任意の抽象化ではないという意味で準抽象化 (quasi-abstraction) である。その性質とは、(a) 一般化された目標の達成に向けたものになっている、(b) 抽象化内の対象や関係はその目標の達成という観点から意味的・機能的なまとまりをもっている、(c) そこに關与する対象は目標を達成するための条件を満たしている、というものである (Cf. 鈴木 (1996) p.98)。
- 13) Ryle(1979)の訳書における訳者あとがきを参照。

文献表

Altman, I. (1997) *The Concept of Intelligence*, UP of America.

ホリオーク&サガード (1998) 鈴木宏昭・河原哲雄 (訳) 『アナロジーの力』新曜社。
 虫明元(2006) 「行動制御の身体認知的基盤」, 『科学基礎論研究』第 105 号, pp. 1-10.
 中村雅之(2006) 「力学系理論に基づく身体性認知科学」, 『科学基礎論研究』第 105 号, pp. 11-17.

Ryle, Gilbert (1949) *The Concept of Mind*, Hutchinson. (ライル (1987) 坂本百大・井上治子・服部裕幸 (訳) 『心の概念』みすず書房.)

(1954) *Dilemmas*, Cambridge. (ライル(1997)篠澤和久 (訳) 『ジレンマ』勁草書房.)

(1979) *On Thinking*, Blackwell. (ライル(1997) 坂本百大・井上治子・服部裕幸・信原幸弘 (訳) 『思考について』みすず書房.)

(1993) *Aspects of Mind*, Blackwell.

鈴木宏昭 (1996) 『類似と思考』共立出版株式会社。

内井惣七 (1995) 『科学哲学入門』世界思想社。

Philosophical Inquiries into Thinking **From Gilbert Ryle's Viewpoint—**

Takuma IKEYOSHI and Yasuo NAKAYAMA

This paper investigated the theoretical basis of the concept of thinking. In this paper, we will define the term 'thinking' as 'trying to resolve something'. That is we will not consider the correlation between thinking and believing.

In the first part of this paper, we examine Gilbert Ryle's works on thinking, especially those after the publication of *The Concept of Mind*. According to Ryle, it is important to clarify two points. One is that the claim "Thinking is language" is wrong. The other is that thinking cannot be reduced to particular skills or techniques. The main points can be summarized as follows:

1. Thinking always contains some novel phenomena that could not be resolved by mere rote or habituation.
2. Thinking is flexible such that:
 - a) it is sensitive to differences in concrete situations and will correct the acquired routine appropriately, and
 - b) it will invent a completely novel routine if circumstances are radically changed (Thinking is self-corrective).
3. Thinking can exhibit various routines formulated to attain a specific goal. However, routine selection may be affected by higher order thinking (Thinking is not always rational).
4. Thinking often experiences a trial and error process. Therefore, it is open to asking questions about justification (Thinking is not itself an argument).
5. Thinking can transfer a learned routine to a new situation (generation of a solution).
6. There are different orders of thinking. Higher order thinking, such as expectation, doubt or anxiety, etc., which concerns the goal of doing, may loosely govern lower order thinking which concerns execution of it.

We think that the proposals outline above could be linked to recent studies in cognitive science, especially with studies of analogy. As we will show, there are common features between Ryle's proposals and findings from studies of analogy in cognitive science. Thus, our analysis of thinking might be significant not only for philosophy of mind but also for cognitive science.